

Chapter22

歴史授業で、シティズンシップを教えるということ

Teaching citizenship in the history classroom

担当：川口広美(広島大学大学院人間社会科学研究科)

hkawaguchi@hiroshima-u.ac.jp

● 著者情報

名前：Yeow-Tong Chia

・略歴：シドニー大学の歴史カリキュラムの上級講師 (senior lecturer)。複合学位プログラムと MA in teaching で歴史カリキュラムのユニットを教えている。シドニー東南アジアセンターのシンガポール担当コーディネーターも務める。研究関心としては、歴史教育に関する教育史や教育制度など。

・論文、書籍：

Chia, Y., Chew, A., Tan, J. (2022). *Teacher preparation in Singapore: A concise critical history*. UK: Emerald Group Publishing Ltd.

Chia, Y., Neoh, J. (2017). Comparative insights on civics and citizenship education and the curriculum: A view from Singapore. In Andrew Peterson, Libby Tudball (Eds.), *Civics and citizenship education in Australia: Challenges, practices and international perspectives*, (pp. 263-278). London: Bloomsbury



名前：Kieren Beard

・略歴：SIR JOSEPH BANKS HIGH SCHOOL の教員 (数学を現在は教えている)。シドニー大学での学生時代に、オーストラリアの教育、特に歴史と英語のカリキュラムにおけるアジアの位置づけに興味を持ち、研究を始めるに至った。



● ひとこと概要

歴史が学校カリキュラムに導入された背景には、国民国家とナショナリズムの台頭がある。本章では、学校歴史の究極の目標であるとするシティズンシップとの関係について取り上げる。その際、オーストラリアの歴史授業でのアジアという概念に着目して検討する。著者たちは、歴史教育における「アジア・リテラシー」を検討することがシティズンシップへの明確な示唆を与えると考えている。ただし、ここでの「アジア」とは、アジア史を教えるだけでなく、アジア系オーストラリアの歴史を教えることも重要であると指摘している。

● 議題

- ・最終章に出てくるアジアの歴史、アジアのシティズンシップ教育観に対して賛同するか？
- ・日本の歴史教育カリキュラムにおける「他者」とはだれか？どのようにそれがナラティブ作成において機能しているか？

● まとめ

1. 歴史教育とシティズンシップ

・政治的な論争の場としての歴史：共通の過去についてのプライドの感覚の育成，過去の正当化のツール

→シティズンシップ教育の中核としての歴史

・1960年からの社会史の開花：「新しい歴史」：学問の幅を広げ・拡大する一方で，歴史の断片化も進む

→その結果，学校教育全体での歴史の役割を低下させることにもつながる（選択教科としての歴史）

※オズボーン，K.（1995）「歴史の地位が低下している時期に，シティズンシップ教育への関心が高まる」

例外）ニューサウスウェールズ州：7～10年で歴史を必修科目として実施

2. シティズンシップとシティズンシップ教育

・シティズンシップ，シティズンシップ教育の概念規定は論争的（Kerr, 2003: 6-7）

・通常，シティズンシップ教育は，生徒が当該国の政治・法・経済システム，権利と責任，政府の機能を学ぶ「公民教育」を重視

→社会化機能と社会秩序の維持が期待されていた

・シティズンシップ教育の強調点の変化：国民アイデンティティの形成→民主主義や市民的価値観形成重視に

→変化の背景：①「ナショナル・アイデンティティの推進に慎重になった」→2回の世界大戦の反省，②現代の民主主義社会に参加するための知識・技能・態度を身に着けるための学校の役割に注目（投票率の低下の反省）

・しかしながら，政治家の中には，依然として国民アイデンティティ形成を重視する人も

→国民アイデンティティ形成が90年代の歴史戦争（History Wars）の論点に

3. オーストラリアとアジア

・「アジア」：オーストラリアのナショナル・アイデンティティを分析するためのキー概念

→Walkerの一連の研究で明らかになったこと：オーストラリアの歴史の中で登場するアジアへの不安（「黄禍」）が社会・経済・政治・文化的状況に与えた影響を検討（Walker, 2002a; Walker, 2012; 2012）

→背景には，アジアとの「近さ」と人種的不寛容さがある

・「アジア・リテラシー」を身に着けるためのアジア研究が伝統的な教育システムで欠如

・背景：一般市民の意識における「アジア」の捉え方

※従来のオーストラリアの西欧民主主義：アングロヨーロッパの伝統を中心に構築、アジアへは恐怖・不安・侵略などの植民地時代の印象とつながる

・Walker and Sobicinska(2012)「オーストラリアにおけるアジア：黄禍からアジアの世紀へ」：アジアは不安と希望の源

・19C～20C：反アジア的な態度 例）ペストの原因がアジアにあるとみなし、アジア系移民が隔離されていた

・1950年代：アジア認識への変化：コロポプラン，貿易通商協定→1972年移民法改定

・1971年オーカムティ報告：アジアの問題を体系的に学ぶ経験がなく，アジア言語を学ぶ機会もないことを指摘・・・その後，多くのアジア研究を意識した報告が出される

・21C～：オーストラリアは国民がアジア研究とアジア言語の双方の能力を身に着けられるように促進してきた。象徴としての

ケビン・ラッド(中国語とのバイリンガル)政権。

・2012年の白書:「すべてのオーストラリア国民がアジアの世紀を生き抜く適切な能力を身に着ける」

4. 歴史教育を通じたシティズンシップ:アジアからの視点

・歴史カリキュラムにおけるアジアの位置づけ:経済的側面よりも文化的側面を重視,アジア系オーストラリア人については補足的に扱うのみ

→依然として「他者」としてのアジア,アジア人の扱い

・しかし,オーストラリアとアジアを深く学ぶ可能性があるトピックの存在もある

例)白豪主義政策,世界大戦におけるアジア系オーストラリア人の役割,アジア系オーストラリア人の活動

→可能な限り「アジア」や「アジア人」をカリキュラムに入れていく必要がある

・教師に期待するアジアの「シティズンシップ」や「歴史」のとらえ方

・アジアのシティズンシップの概念:道徳とシティズンシップ教育が混同される影響(儒教の伝統)

⇨西洋:民主主義と市民的価値の教育が重要,道徳教育とシティズンシップ教育が相互排他的にとらえられる(Lee, 2008)

・アジアの歴史観:東アジアの歴史は現在を移す鏡としての過去を重視。過去は現在と対話的な関係にあり,現在に教訓を与えてくれるものととらえられる(Huang, 2010)

⇨西洋:過去を現在から切り離された外国とみなす。歴史は異質なものとする影響(Sandwell, 2003)

5. 結語

・オーストラリアにおける「アジア」への視点が示唆するもの

→歴史的思考アプローチの限界,

激動するグローバル化の中で対話と熟議というアジアパースペクティブが示唆するものが歴史教育を豊かにする。

(理由)既存の歴史的思考アプローチ:西洋的なアプローチに基づいたもの(過去は現在から切り離されたもの,シティズンシップは歴史から切り離されている)

・歴史とシティズンシップに関する関係性:過去と現在,歴史とシティズンシップとの間に,対話的・統合的・体現的な関係があることを指摘。それは「人間であること」の究極な目的とリンクする。

→Barton, K.の指摘するヒューマンスティックな教育と熟議という概念とも対応する